

拓殖大学長 渡辺 利夫氏



〈わたなべ・としお〉慶応大学大学院経済学研究科博士課程修了。平成12年4月拓殖大学教授・国際開発学部（現国際学部）長、17年4月同学長・大学院長。69歳。山梨県出身

提言ーニッポン

——著書の『新脱亜論』（文春新書）が静かな話題になっている

「『脱亜論』は福沢諭吉が明治18年に時事新報に掲載した社説だ。諭吉がこれを書いた明治前期と現在の極東アジアの地政学的構図が酷似している——という私の指摘が、あ

る種の実感をもって読者に受け取られているからかもしれない。諭吉は清国と朝鮮の2国を「亜細亜東方の悪友」として『謝絶』し、自らのアイデンティティーを西洋に求めることによって、初めて日本の自立が可能になると主張した。事態は日清・日露の両戦争にまで発展し、これに勝利することによって、日本は存亡の危機を脱することができた。現在の極東アジアは、あの時代の日本を深く悩ませた

地政学的構図が再現したかのようだ」

——極東アジア情勢をどのようにとらえているか

「まず国民を飢餓に追いやりながら核開発に躍起になっている北朝鮮。中距離弾道ミサイル『テポドン』でアメリカを牽制し、多数の準中距離弾道ミサイル『ノドン』の照準を日本列島に合わせて、恫喝を繰り返している。北朝鮮の狙いが、日本からの膨大な賠償金の獲得にあるのは明らかだ」

「さらに大きな問題は中国の膨張だ。中国はすでに南シナ海の制海権は握ったと私はみている。東シナ海については、領海法で中国の大陸棚の東端である沖繩トラフを国境と定めており、これを変更することはありえない。中国の真の狙いは海洋覇権の掌握だ。長期的には米中覇権争いの舞台が太平洋に移っていく。中国の反日がやむことも期しがたい」

「公」に生きることの意味伝えたい

「ロシアには、専制主義のDNAが眠っている。プーチンが主導権を握る現政権の行動様式には、資源・エネルギーを武器とした専制主義大国への指向性が見え隠れする。北方四島返還へのかたくなな対応を合わせ眺めれば、ロシアが資源不足国日本への『圧迫』を加えてくる可能性を否定することはできない」

——日本はどう対応すべきか
「主権国家として自衛権を確保しうるだけの軍事力の増強はきちんとしていかねければいけない。さらに日米同盟を実質化させるために、集団的自衛権の行使を認めなければならぬ。不条理に満ちた国際権力の海の中で生き延びていくためには、利害を共有する国を友邦として同盟関係を構築し、集団的自衛の構えをもたなければならぬ。将来の同盟の相手も、強力な軍事力と国際信義を重んじる海洋覇権国家であってほしい」

——そんな歴史観を踏まえ、若者にメッセージを

「今の日本人は利己的な人生的みを追求し、利他的に生きることを排除してはいないだろうか。共同体や社会の中に住まわっているという『共生感』を失ってしまえば、残るのは自分一人という『個』のみだ。若者に『公』に生きることの尊い意味を伝え続けていきたい」